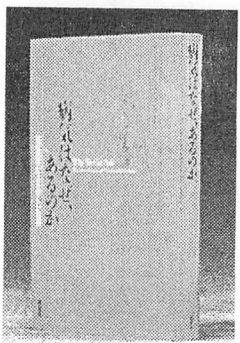


病気はなぜ、あるのか

Why We Get Sick

R・M・ネシー、G・C・ウィリアムズ [著]



(長谷川寿一ほか訳、新
曜社・380円・4200円)
R. M. Nesse ミシ
ガン大の精神科医。進化
G. C. Williams 進化
生物学の指導的学者。

〔評者〕
新妻 昭夫

進化論的に探る虫垂炎の由来

本書(原著一九九四年)は「進化医学(ダーウィン医学)」という新しい分野を提唱し確立するために書かれた。従来の医学とのちがいは、病気が「どのような」起こるか(至近要因)ではなく、病気は「なぜ」あるのか(究極要因)を研究するという点にある。

盲腸とその先端の虫垂は、祖先の哺乳類では重要な消化器官だったが、人間では退化器官である。従来の医学は、虫垂炎の原因が細菌感染であること(至近要因)を突きとめ、適切な治療法を確立してきた。一方、進化医学は、虫垂炎の究極要因を検討する。炎症がおけると虫垂への血流が増加する。細菌感染に対する生体の防御反応である。だが虫垂が小さいほど、炎症で腫れると血流がはばまれ、炎症の悪化で虫垂が破裂する可能性が高い。したがって自然淘汰は、虫垂のこれ以上の退化を阻止すると予想される。過去の遺産である虫垂と虫垂炎は、将来もなくならないということだ。他の例も一部だけ列挙してみよう。発

熱は免疫機能を高めるための、嘔吐は毒物を排出するための防御反応として進化してきたと考えられる。痛風は血液中の尿酸の結晶化が原因だが、尿酸は強い酸化作用があり、老化防止と人間の長い寿命に関係して尿酸濃度は増加してきたらしい。くしゃみで感染する風邪などの病原菌は、人間が通常通りに行動してくれたほうが感染率は高いので、その毒性を弱める方向に自然淘汰は作用するだろう。肥満を心配しつつも高カロリーの食べ物に手が出てしまうのは、サバンナで飢餓の不安におびえながら暮らしていたころの名残だと考えられる。

このような進化医学による説明は、著者らが繰り返し強調するように、病気の診断や治療には役立たない。しかし、病気に対する深い理解を、医者だけでなく患者予備軍である私たちにも提供してくれる。病気をむやみに恐れたり、ただ医者まかせにしたりするのではなく、病気に前向きにむかいあう知恵と勇気を私たちはもちたい。(恵泉女学園大学教授)